九頭神遺跡・宮が尾古墳隣接地調査報告書

～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３～

１９９５年３月

善通寺市教育委員会

序

善通寺市内には数多くの埋蔵文化財が残されています。これらが発掘調査されるたびに新たな事実が解明され、そして新たな謎の解明が始まります。

本年度は善通寺市内遺跡発掘調査事業として、平野部と丘陵部、市内二箇所で遺構の確認調査が実施されました。平野部では昭和63年度にその一部が発掘調査された九頭神遺跡の推定域内、丘陵部では平成４年度から保存整備事業が開始された、史跡有岡古墳群のうちの一基である宮が尾古墳の隣接地が調査の対象となりました。

ところが、いずれも重要な遺跡の隣接地であるにもかかわらず、小量の遺物が出土しただけで、明確な遺構を検出することはできませんでした。このように遺跡の存在を予想し発掘調査を実施しても、遺構が確認されないことが稀にあります。

しかし、遺構が発見されないことは調査の失敗ではありません。調査されない土地は完全に未知であり、遺構が存在しないということを確認することは新たな遺構の発見に匹敵します。なぜなら、そこに生活の痕跡が無いということにも何らかの理由がある筈です。この事実を調査研究することで、古代の生活環境や社会を知ることができます。小規模な調査でも、その数を確実に増やすことで、古代の善通寺市が少しずつ見えてくるのです。

このたびの善通寺市内遺跡発掘調査事業実施にあたり、ご協力をたまわりました関係機関及び周辺地権者の方々、また報告書刊行にあたり、ご指導をたまわりました諸先生各位に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査に携われた調査関係者の皆様のご苦労にも心から感謝申し上げます。

平成７年　３月３１日

善通寺市教育委員会
教育長　勝 田 英 樹

例　　言

1．本書は善通寺市教育委員会が国庫補助事業として実施した、埋蔵文化財調査事業(善通寺市内遺跡発掘調査事業)の発掘調査報告書である。

2．本事業は善通寺市下吉田町九頭神113-5において、平成6年8月15日から同年9月1日まで実施し、史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)に隣接する善通寺市善通寺町3223-1では平成9月2日から同年9月30日まで実施した。

3．本書の編集作成は善通寺市教育委員会文化振興室主事笹川龍一が行った。

4．補助事業の中で実施された、横穴式石室の実測や墳丘周辺部の測量調査及び遺物の実測は四国学院大学考古学研究会の協力を得て笹川が行った。

5．本事業実施及び本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大な御指導・御援助並びに資料提供を得た。記して謝意を表します。(敬称略・順不同)

香川県教育委員会、香川県埋蔵文化財調査センター、四国学院大学考古学研究会、
三宅昭太郎、香川昭義、新池功成

調査参加者：石村　守、井原義春、井原康夫、山田金太郎、藤沢　進
竹森ミユキ、岩本希世子
(四国学院大学考古学研究会)
宮脇　勝、岡村幸広、米田克彦、畑本紀洋、内田賢一、
矢野由紀子、瀬尾裕子、真鍋富子、菅香寿葉

目　　次

第一章　遺跡周辺の地理と歴史 ---------- 4
第二章　調査の概要 ---------- 10
　① 九頭神遺跡 ---------- 10
　② 宮が尾古墳隣接地 ---------- 14
第三章　ま と め ---------- 18

挿　図　目　次

第 1図　善通寺市遠景 ---------- 4
第 2図　調査地と周辺の主要遺跡 ---------- 7
第 3図　九頭神遺跡調査地位置図 ---------- 10
第 4図　九頭神遺跡調査地平面図 ---------- 11
第 5図　九頭神遺跡トレンチ土層実測図 ---------- 12
第 6図　九頭神遺跡包含層出土遺物実測図 ---------- 13
第 7図　宮が尾古墳及び調査地位置図 ---------- 14
第 8図　宮が尾古墳及び調査地平面図 ---------- 15
第 9図　宮が尾古墳隣接地トレンチ平面図・土層実測図 ---------- 16
第10図　宮が尾古墳隣接地包含層出土遺物実測図 ---------- 17

図　版　目　次

第11図　九頭神遺跡調査地全景 ---------- 21
第12図　第１トレンチ設定状況(九頭神遺跡) ---------- 21
第13図　第２トレンチ設定状況(九頭神遺跡) ---------- 22
第14図　第３トレンチ設定状況(九頭神遺跡) ---------- 22
第15図　九頭神遺跡包含層出土遺物・(石器) ---------- 23
第16図　九頭神遺跡包含層出土遺物・(土器) ---------- 23
第17図　宮が尾古墳隣接地伐採後の状況 ---------- 24
第18図　第１トレンチ設定状況(宮が尾古墳隣接地) ---------- 24
第19図　第２トレンチ設定状況(宮が尾古墳隣接地) ---------- 25
第20図　宮が尾古墳隣接地トレンチ設定状況(全景) ---------- 25
第21図　宮が尾古墳隣接地包含層出土遺物 ---------- 26
第22図　調査地と隣接する史跡指定地内で検出された宮が尾第２古墳 -------- 26

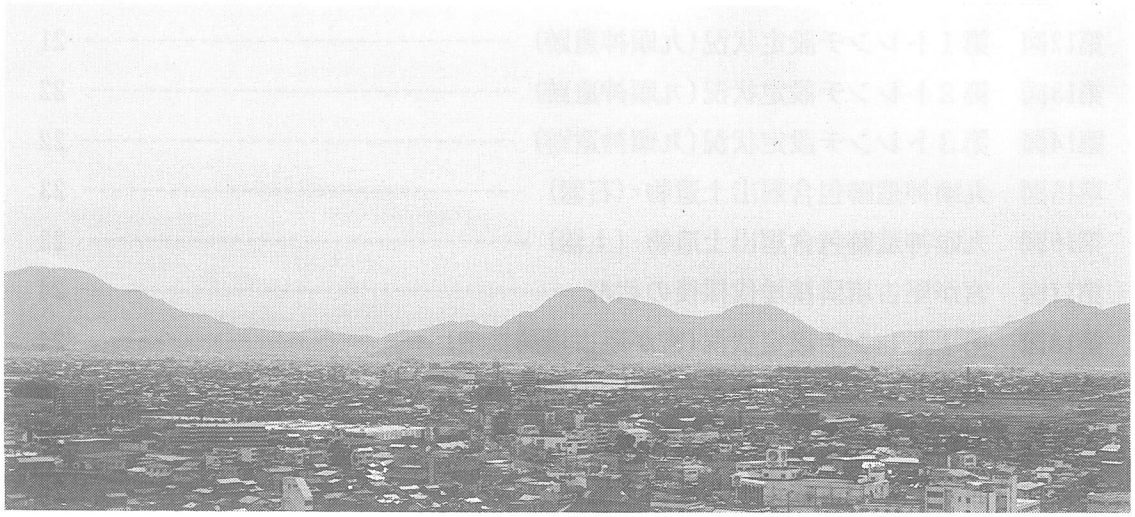
第一章　遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70～80㎝が強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が包含されていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ケ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。



第1図　調査地遠景

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、畿内第１様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は２～３㎞を計るが、当時の復元海岸線が現在の標高５ｍあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約3,000年前まで遡ることができる。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稲木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりか、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに実施された発掘調査を順に紹介すると、総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡の調査から始まる。ここでは弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺(伝導寺跡)の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘

調査が実施されたが、ここでは約1,500㎡の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部などが発見され、特に弥生時代終末期の竪穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏃・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居や小児壺棺墓・箱式石棺等が確認されている。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

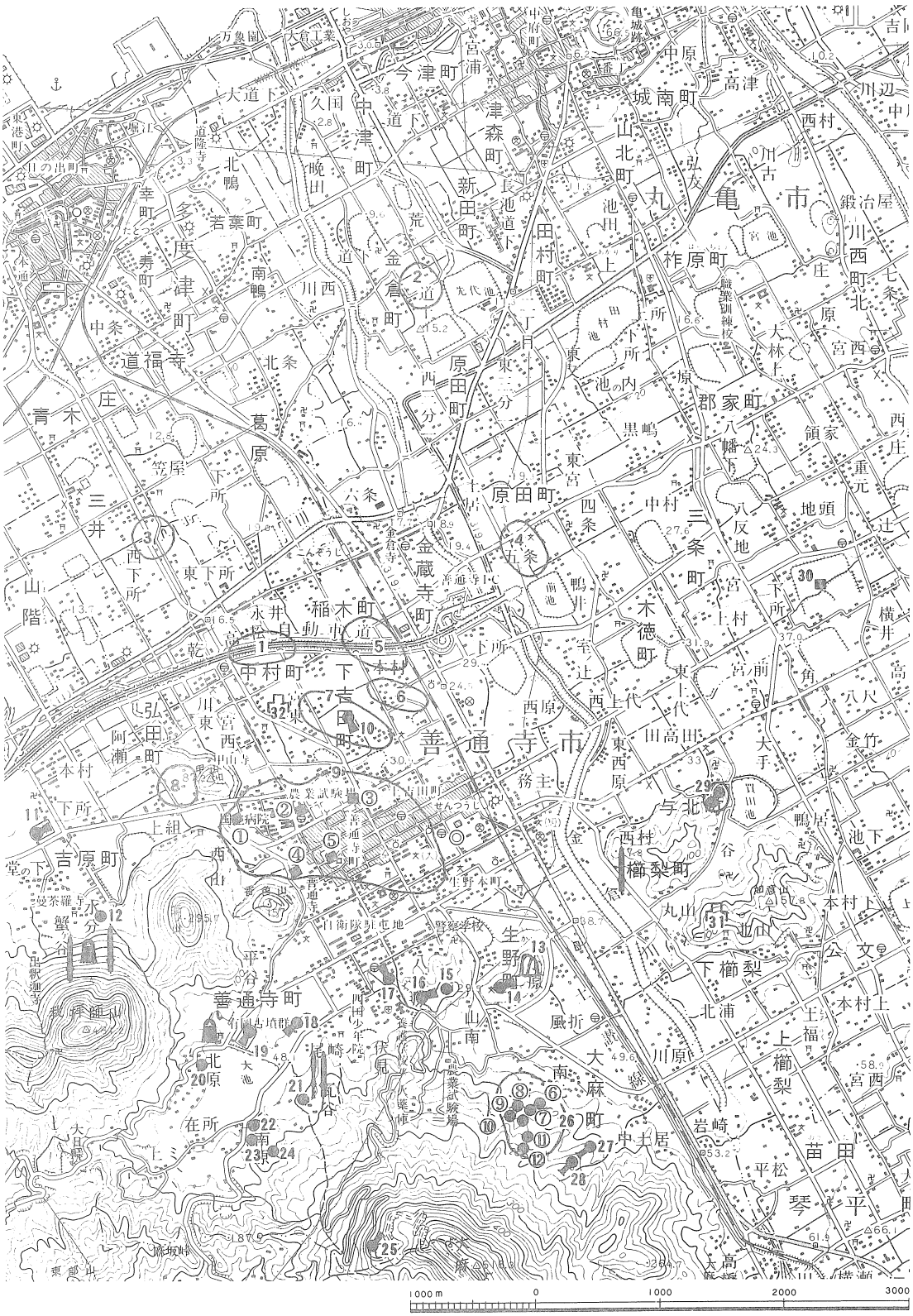
ここから北方に隣接する稲木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居群や墓地、中世の建物跡群が多数確認されている。こうした集落遺跡群は旧地形をみると、いずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果からいずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時頃の善通寺周辺部には、”大集落”というよりはむしろ”地方都市”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通時市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・細形銅剣5口・中細形銅鉾1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形銅剣5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稲作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤

1. 永井遺跡
2. 中ノ池遺跡
3. 三井遺跡
4. 五条遺跡
5. 稲木遺跡
6. 石川遺跡
●7. 九頭神遺跡
8. 甲山北遺跡
9. 旧練兵場遺跡群
①彼ノ宗遺跡
②仙遊遺跡
③仲村廃寺(白鳳)
④善通寺西遺跡
⑤善通寺伽藍(奈良)
10. 下吉田神社古墳
11. 青龍古墳
12. 大塚池古墳
13. 磨臼山祭祀遺跡
14. 磨臼山古墳[蠟]
15. 鶴ノ峰山頂古墳
16. 鶴ノ峰4号墳[蠟]
17. 丸山古墳[蠟]
18. 王墓山古墳[蠟]
19. 菊塚古墳
20. 北原古墳群
21. 瓦谷1号墳
22. 御館神社古墳
●23. 宮ノ尾古墳[蠟]
24. 宮ノ尾2号墳
25. 野田院古墳[蠟]
26. 岡古墳群
⑥岡5号墳
⑦岡6号墳
⑧岡10号墳
⑨岡13号墳
⑩岡11号墳
⑪夫婦岩1号墳
⑫夫婦岩2号墳
27. 大麻山椀貸塚
28. 大麻山経塚
29. 陣山古墳群
30. 宝幢寺跡(白鳳)
31. 櫛梨城跡(中世)

:銅鐸出土地　:銅剣出土地　:銅矛出土地



第2図　調査地と周辺の主要遺跡

を背景に、特定の有力者が独自の技術により灌漑治水事業等を行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者となり有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになるが、古墳時代を迎えこの地の勢力は更に発展を続けている。旧練兵場遺跡では弥生時代の集落遺構群に古墳時代の集落遺構群が重なり、発掘調査の際には遺構の複合状況を把握することが困難と思われる状況が頻繁にみられる。

集落域は市街地から北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が墓域と推定されている。この地区だけでも400基を超えており、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心に大麻山椀貸塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓（標高405m）のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古段階の前方後円墳で、前方部は盛り土、後円部は積石墳で構築されている。

また、有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野鑵子塚古墳（消滅）・磨臼山古墳・鶴が峰2号墳（消滅）・鶴ガ峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現するが、中には宮が尾古墳に代表されるような線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、様々な点で興味は尽きない。

この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯一族の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い古墳が造られなくなるが、既に白鳳期には佐伯の氏寺である仲村廃寺(伝導寺跡)が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、その際に500m程南に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末頃佐伯氏に弘法大師(空海)が誕生したことによって、平安時代から室町時代にかけては門前町として栄え、鎌倉時代から室町時代初期にかけて寺院の最盛期を迎え、地名も寺名そのまま善通寺村となるが、戦国時代には殆どの寺院は焼失してしまう。

寺社の復興は江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからであり、この頃四国八十八

カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となる。

明治29年には第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びるようになったが、このため道路や鉄道網が整備された。そして善通寺町として都市化が始まり、昭和29年3月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村との合併により市制が施行され、善通寺市が誕生した。

参考文献

『善通寺市の古代文化』	善通寺市	1973年11月
『善通寺市史』	善通寺市	1977年 7月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	丸亀市教育委員会	1982年 3月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年 3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年 3月
『五条遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983年11月
『仲村廃寺発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1984年 3月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1985年 3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986年 3月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1988年 3月
『稲木遺跡』	稲木遺跡発掘調査団	1989年 3月
『仲村廃寺』	善通寺市教育委員会	1989年 3月
『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』	善通寺市教育委員会	1992年 3月
『史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)調査報告	善通寺市教育委員会	1993年 3月
『御館神社古墳発掘調査報告』	善通寺市教育委員会	1993年 3月
『青龍古墳調査報告書』	善通寺市教育委員会	1994年 3月

～四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書～

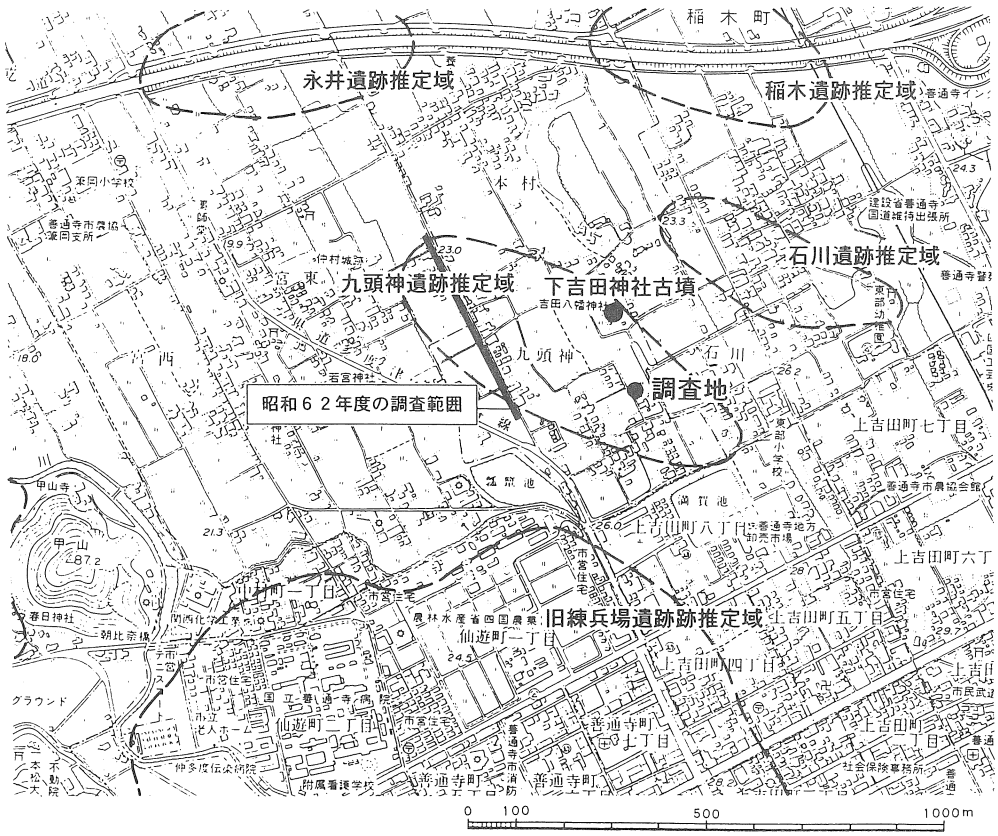
『中村・乾・上一坊遺跡』	第一冊	香川県教育委員会	1987年 3月
『矢ノ塚遺跡』	第三冊	香川県教育委員会	1987年10月
『稲木廃寺』	第六冊	香川県教育委員会	1989年 3月
『永井遺跡』	第九冊	香川県教育委員会	1990年12月

第二章　調査の概要

①九頭神遺跡

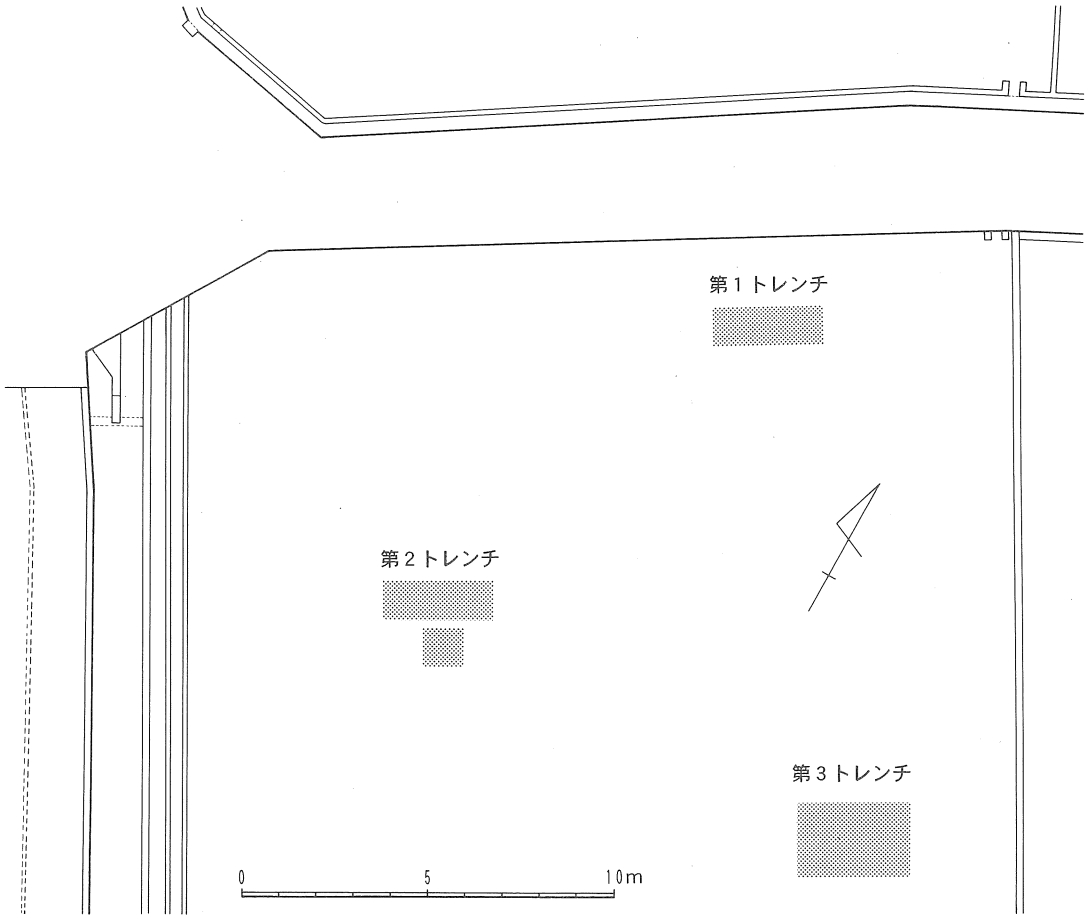
九頭神遺跡は善通寺市街地から北に広がる田園地帯にある。この場所は以前から、弥生時代の土器や石器が出土することが知られていたため、昭和62年度には都市計画道路大通線改良工事に伴う発掘調査が行われた。その結果、設定された調査区はこの遺跡を縦断しており、弥生時代中期から後期末にかけての竪穴住居跡群や箱式石棺・小児壺棺、古墳時代の土坑や溝などが確認され、これより南に広がる旧練兵場遺跡からやや距離を以て、同時期に展開した小規模な集落遺跡であることが判明した。平野部には他にも小規模な集落が散在している筈であるが、各々の時代や正確な範囲、関連等は殆ど知られておらず、旧地形の復元と併せた古代環境の解明が待たれている。

しかしながら、九頭神遺跡周辺の田園地帯は昭和62年度の都市計画道路大通線の完成以降宅地化が進んでいる。そして現状では遺跡の性格や範囲等が不明のまま失われてしまう恐れがあるため、市教育委員会では宅地化が計画されている土地について、県教育委員会と協議の上、遺構の確認調査を実施した。事業は国庫補助・県費補助による埋蔵文化財調査事業である。



第３図　九頭神遺跡調査地位置図

この図に示した遺跡の推定域内には複数の小規模流路の存在が考えられるため、現在考えられている一遺跡が一集落に該当するか否かは疑問である。

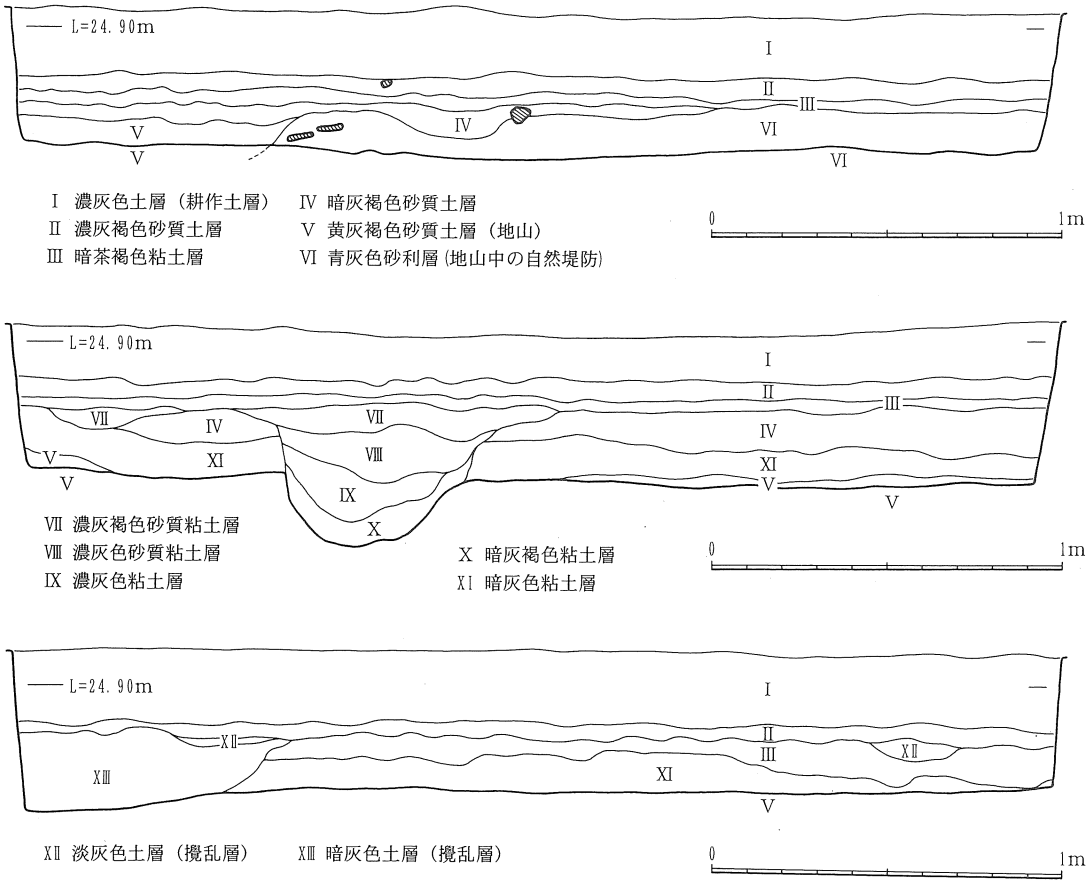


第４図　九頭神遺跡調査地平面図

調査地は前期の前方後円墳であったと伝わる吉田八幡神社の南方200m程に位置している。 ここは前回の調査地で確認された集落の中心から南東、緩やかな傾斜地の上方約400mに位置しているが、両者の間には南東から北西方向に流路と思われる地形の変化が認められるため、遺構が連続しない可能性が高いと考えられる。

調査地周辺の地形は以下のとおりである。北方は吉田八幡神社あたりまで微高地が連続する。 東方は100m程微高地が続いた後に大規模な旧河道の痕跡と見られる低地を隔てて石川遺跡推定地である微高地が見える。南方は旧練兵場遺跡推定域との間の大きな旧河道によって寸断されていると考えられるが、宅地化が促進されており範囲は不明である。
そして、調査地西側に水路と農道を隔てて隣接する水田面は調査地より低いため、当該地は微高地西端の傾斜地にあたり、昭和62年度に調査された地区との間に小さな流路の存在が考えられる。そこで、調査対象地に幅１m、東西方位に長さ３mのトレンチを計３箇所に設定し遺構の確認調査を行った。※第３トレンチのみ幅２m

その結果、耕作面から30cm程掘り下げたところで遺物の包含層(第Ⅳ層・第XI層)が検出された。この包含層を除去した下は地山であり、この上面は緩やかに東から西に下るものの大部分が削平されている様子が確認できた。包含層から出土した遺物は弥生時代の土器

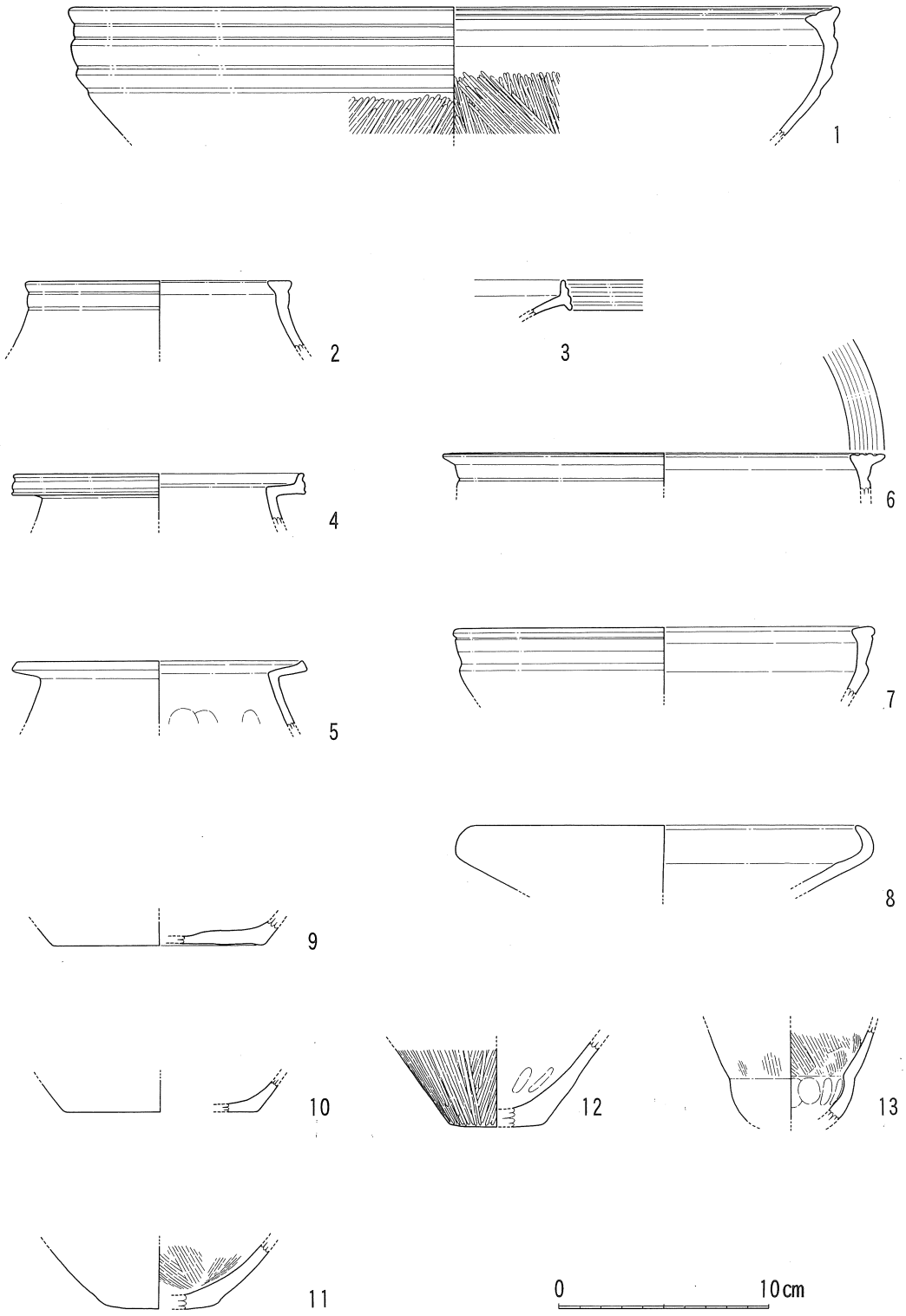


第５図 九頭神遺跡トレンチ土層実測図（上から第1～第3トレンチ、いずれも南壁土層）

や石器の砕片ばかりで、その時代も前期(畿内第Ⅰ様式後半)から後期末までとほぼ全時期のものが確認された。土器片の中で最も多く見られたのは、中期(畿内第Ⅲ様式後半)から後期末頃までのもので、それ以前のものは極めて少ない。この調査結果は昭和62年度の調査結果と合致する。このことから平野部の微高地には同時期に多数の散在集落が展開し、付近の村と有機的なつながりを形成していたものと考えられる。

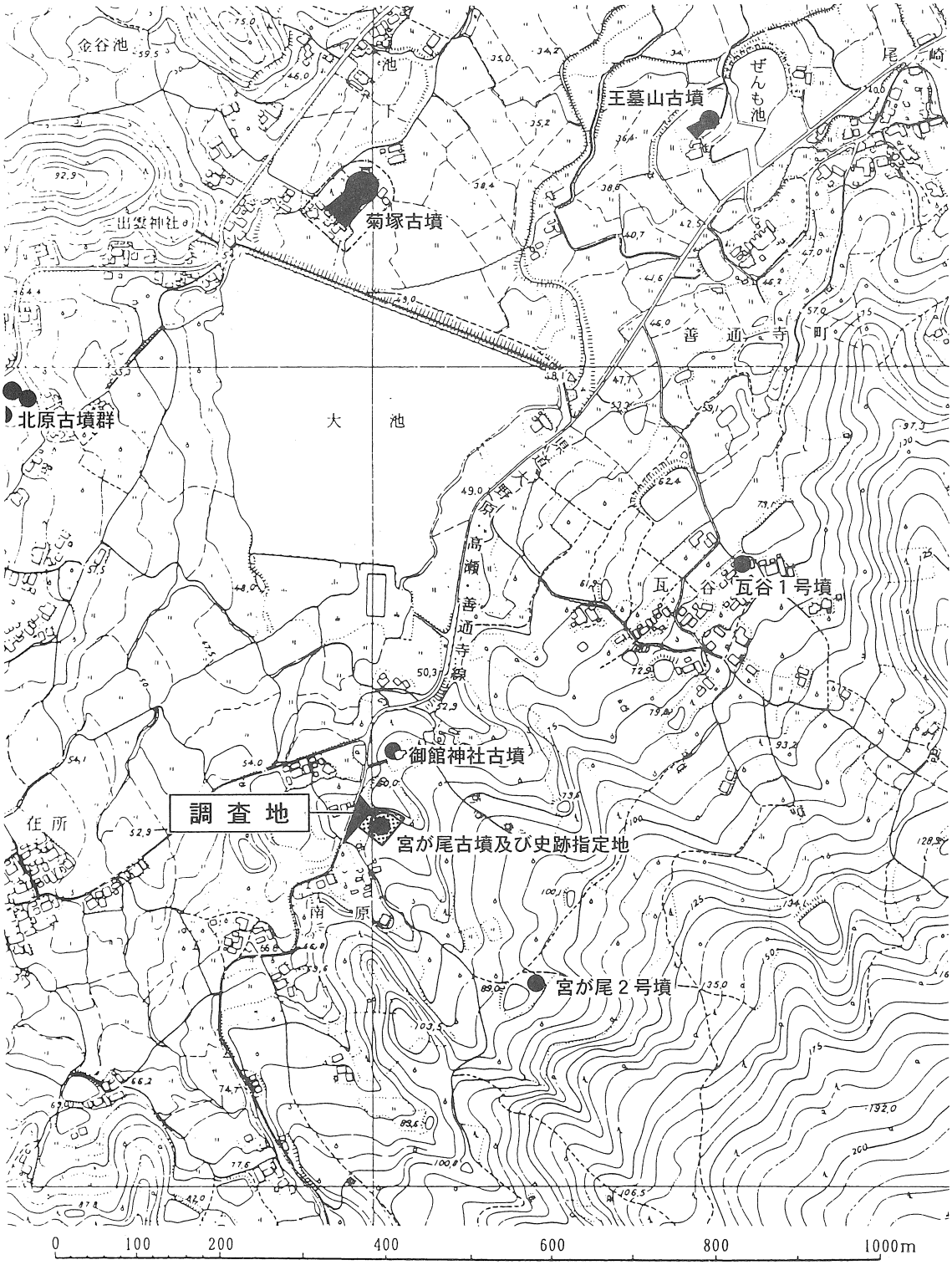
第１トレンチでは、自然堤防と考えられる礫帯が地山から突出した部分が確認された。また、第３トレンチでは包含層の堆積が安定しておらず、客土されたものである可能性が高い。遺構は第２トレンチ中央で土坑状のものが確認されただけであり、時期や性格を明らかに出来る遺物は検出されてはいない。

従って、当該地は下吉田八幡神社から南南東に延びる小さな微高地を中心とした小規模な集落域の西端の傾斜地にあたるため希薄な包含層のみで遺構等は確認されなかったが、小さな流路を隔てて比較的大きな北西側の集落域と隣接している様子から、広義に解釈すれば九頭神遺跡に含まれるであろう。



第6図　九頭神遺跡包含層出土遺物実測図

②宮が尾古墳隣接地

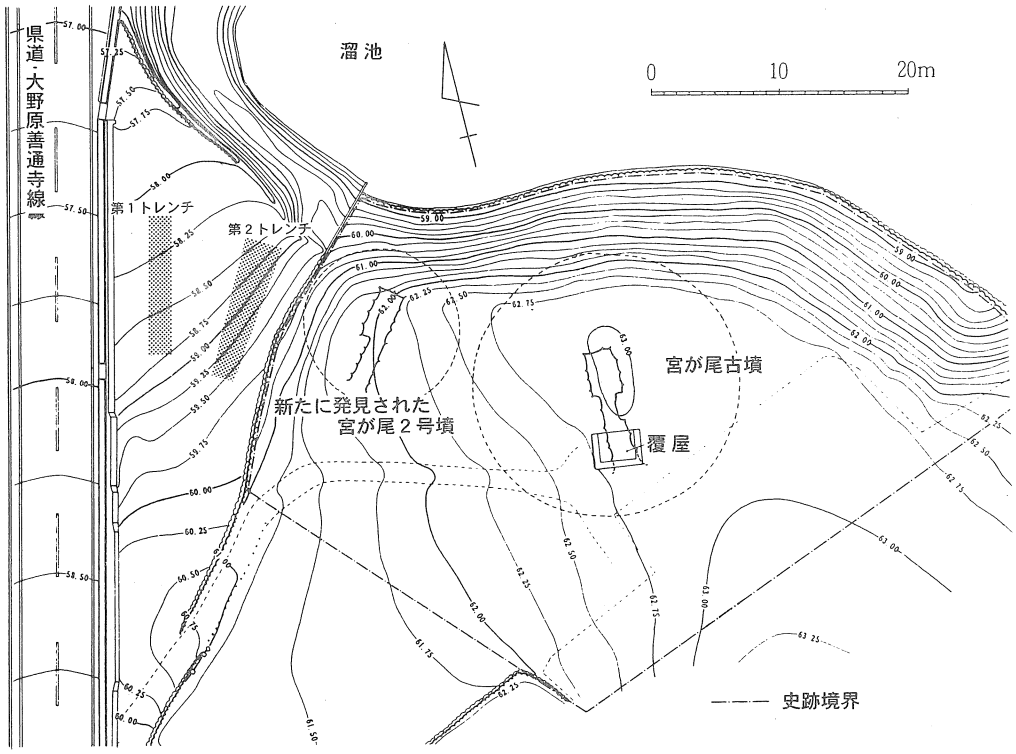


第７図　宮が尾古墳及び調査地位置図

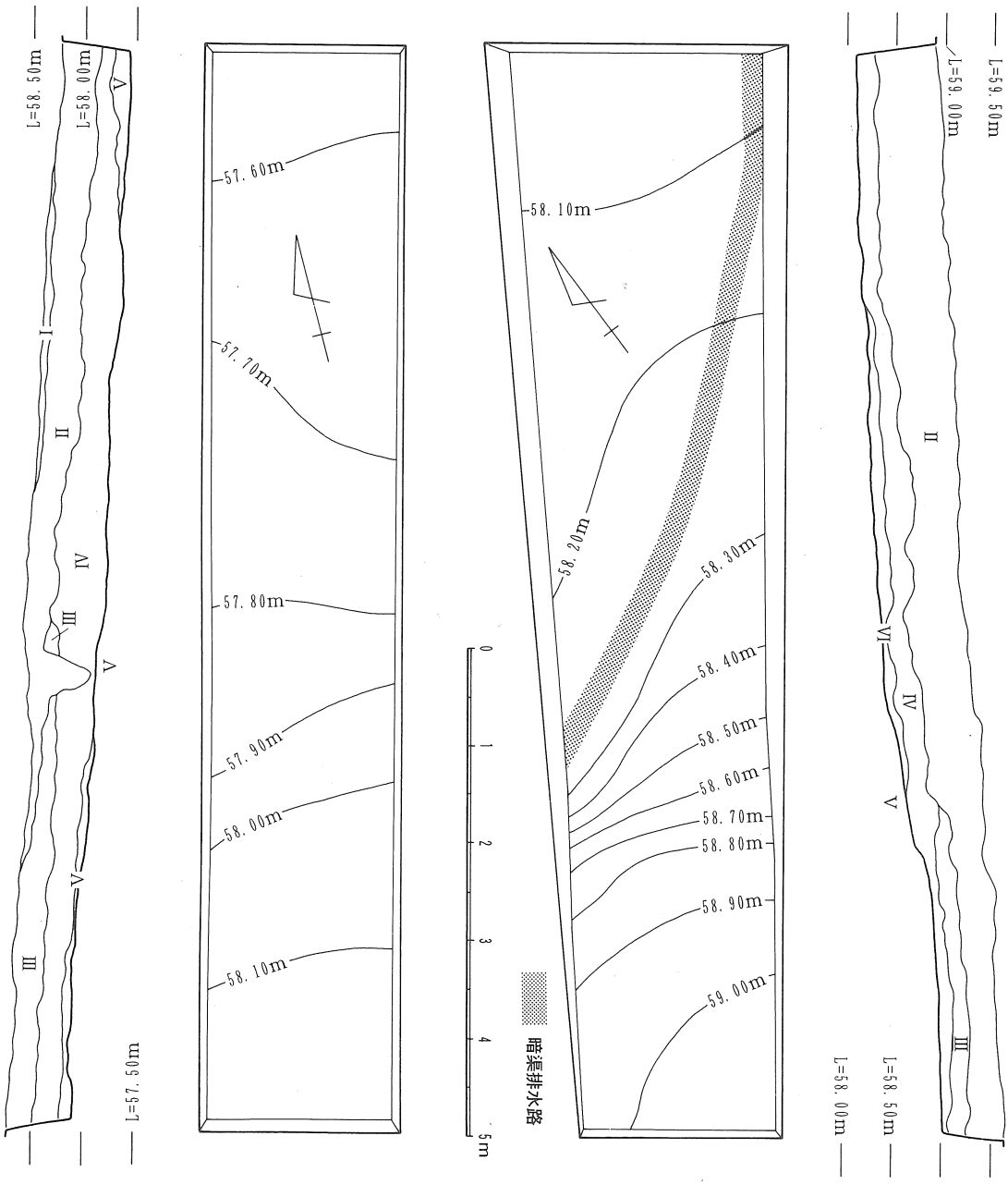
本市では古代の集落遺跡は市街地を中心に北方に展開し、市街地南西側の丘陵部は古墳時代以降墓域として利用されており、これまでに400基を超える墳墓が知られていた。 この中には同一系譜上の首長墓と考えられる前方後円墳が多数含まれており、讃岐の古代史解明に貴重な役割を果たすものと評価は高い。そして、昭和57年度の王墓山古墳緊急発掘調査を契機に、この地を代表する６基の古墳が史跡の指定を受け、昭和61年度から平成３年度にかけて王墓山古墳の保存整備事業が行われ、平成４年度からは線刻壁画で知られる宮が尾古墳の保存整備事業が行われている。

平成４年度には地中に埋没した宮が尾古墳の墳丘の規模を把握するための試掘調査、平成５年度は史跡の公有地化事業が実施され、平成６年度から本格的な保存整備事業に着手することとなった。

史跡指定地はその西側を南北に走る県道からやや離れており、整備された史跡を有効に活用するためには、その間の果樹園を併せて整備する必要が生じた。そこで、この土地は市が単独で購入し関連事業を実施することとなったが、史跡に関連した墓道等の遺構の存在が考えられたため、県教育委員会と協議の上、遺構の確認調査を実施した。事業は国庫補助・県費補助による埋蔵文化財調査事業である。



第８図　宮が尾古墳及び調査地平面図

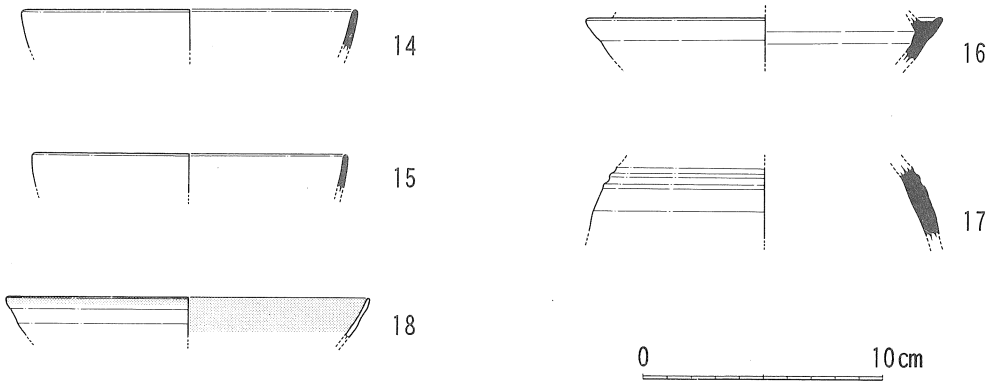


Ⅰ 暗灰色土層(耕作土層)　Ⅲ 黒灰色土層(耕作土層)　Ⅴ 灰茶褐色砂質粘土層(地山)
Ⅱ 濃灰色土層(耕作土層)　Ⅳ 淡茶灰色砂礫土層　Ⅵ 灰茶褐色砂質土層

第9図　宮が尾古墳隣接地トレンチ平面図・土層実測図

調査地は果樹園であり、東側に隣接する史跡の平均地表面より3～4m低い位置にあるが、史跡側は平成4年度の調査によって、古墳の周囲に付近の池の浚渫土が厚く盛られたものであることが判明している。従って、実際は宮が尾古墳の裾部と余り比高差が無いものと判断されたため、墓道・祭祀跡等の関連遺構の存在が考えられた。

そこで、平成6年度史跡保存整備事業(発掘調査事業)に伴い、掘削用重機や運搬車両の



第10図　宮が尾古墳隣接地包含層出土遺物実測図

進入路を計画している範囲２箇所に全長11mのトレンチを設定し、遺構の確認調査を実施した。　第１トレンチでは厚い耕作土の下に、南から北に緩やかに下る灰褐色砂質粘土の地山が確認できたが、その表面には小さなマンガン結核と亀甲状の亀裂痕が認められた。これは第四期更新世の洪積層で他の場所では部分的に粘性土に変わる。この下層は中生代白亜期の領家花崗岩の強風化層となっていることが、史跡側で実施したボーリング調査の結果で判明している。遺物は攪乱層中から須恵器片が二点(14・17)とサヌカイト製の石鏃が一点出土しただけである。

第２トレンチでは、第１トレンチ同様厚い耕作土の下に灰褐色砂質粘土の地山が確認できた。トレンチ南端は旧地形を反映しており尾根状に急に高くなるが、その裾部を南西から北東に向かって安山岩を利用した暗渠排水路が検出された。これは近世の水田に伴うもので、調査地に隣接する溜池堤防外側の水路に繋がる。遺物は攪乱層中から須恵器片が二点(15・16)と瓦器片(18)が一点、弥生土器の破片が数点出土している。

当該地は水田として削平され開墾されていたようであることから、暗渠排水路より北西側には関連遺構が残る可能性は極めて低いと判断された。

以下、攪乱層から出土した遺物を説明する。

弥生土器の時期は不明であるが、須恵器片と瓦器片の時期は判明している。いずれも小片ではあったが、その時期を明らかにすることができた。

本調査完了後に実施された史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)の発掘調査によって、本調査地と隣接する史跡内から新たに一基、横穴式石室を主体部とする直径12m程の円墳が検出され、その状況からこの古墳の副葬品の一部が移動したものと判断されたためである。

付近に宮が尾２～３号墳が確認されているため本墳は宮が尾第２古墳としたが、副葬品は７世紀前半のもので、12世紀中葉頃に二次利用があったらしく多数の瓦器・黒色土器・捏鉢・土師器等が出土している。　※ 図版 第22図参照。

第三章　まとめ

善通寺市街地から北方、東方一帯に広がる田園地帯では、都市計画道路等の整備に伴い宅地化が進んでいる。この地域を含めて平野部全域には古代の集落遺跡が数多く残されており、これらをできうる限り保存するためには、事前に不明部分の確認調査を行い基礎資料を充実させ、今後の開発行為や研究に備えることが急務である。

今回の平野部での調査地は集落遺跡の可能性が考えられる範囲内で実施され、弥生時代前期の土器がわずかに出土した他、中期から後期にかけての土器が出土している。いずれも砕片であり、同一包含層に各時期の遺物が混在し、摩滅したものが多いことなどから二次的な堆積であると判断された。

当該地は当初の遺跡推定範囲内ではあったが、集落内を流れる流路で部分的に寸断された箇所であることが判明した。

また、旧地形は現在の地形や土地利用にある程度反映されている状況も確認されたことから、地形の観察は従来どおり遺跡の範囲を特定するために有効な手段と思われた。

丘陵部では、史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)の保存整備事業が進む中、史跡の活用に供するため、本市が隣接する土地の公有化と整備を計画したが、史跡に関連する遺構の存在が考えられたため遺構の確認調査を実施した。

結果、調査地内は開墾により旧地形は失われており遺構等は検出されなかったが、調査地に隣接する史跡内部からは当初の予想どおり関連遺構が確認された。

本調査の結果ではないが、宮が尾第2古墳の発見は史跡である宮が尾古墳を研究する上で極めて価値が高い。宮が尾古墳は見事な線刻画による装飾古墳であるが、盗掘等により副葬品は殆どが失われており、被葬者を知る手掛かりは極めて少ない。ところが、宮が尾第2古墳は石室は半壊しているものの副葬品は豊富に残されており、継続調査で宮が尾古墳の被葬者を知る手掛かりが得られる可能性が考えられる。両者の位置関係等から、6世紀末頃に構築された宮が尾古墳とその隣に7世紀初頭に構築された第2古墳の濃密な関係は疑いないものである。

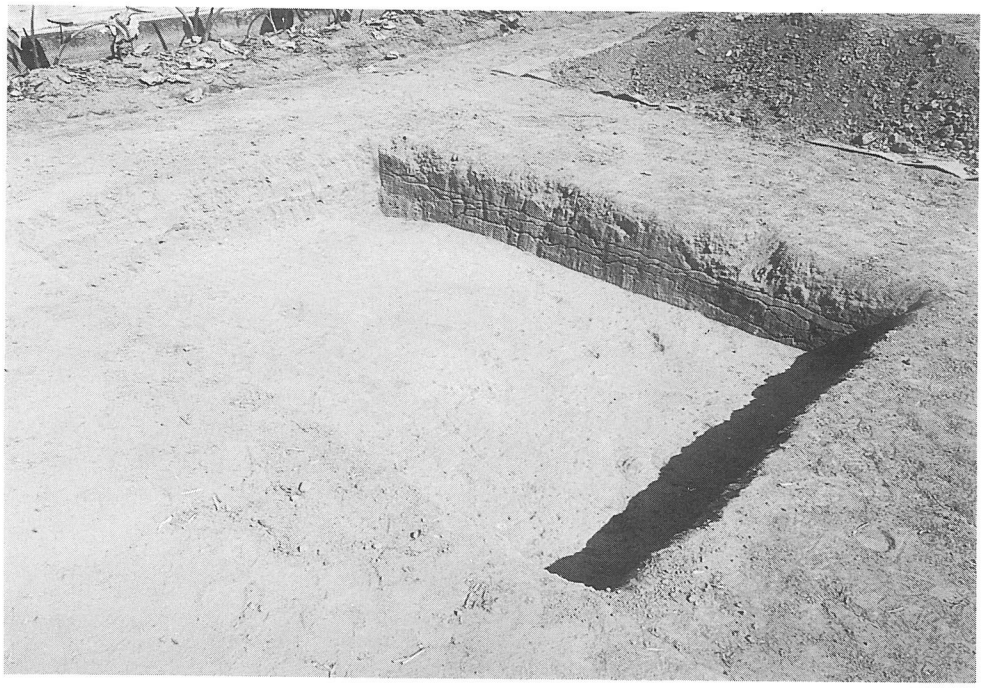
宮が尾古墳及び隣接地では弥生時代の土器や石器も確認されていることから、有岡地区の丘陵部にも市北西部の吉原町と同様に半高地性の集落の存在も考えられる。この地の丘陵部には、宮が尾第2古墳のようにその存在を知られず地下に埋没した遺構も多く残されていると考えられるため、継続した分布調査等の必要を痛感する。

図　　版

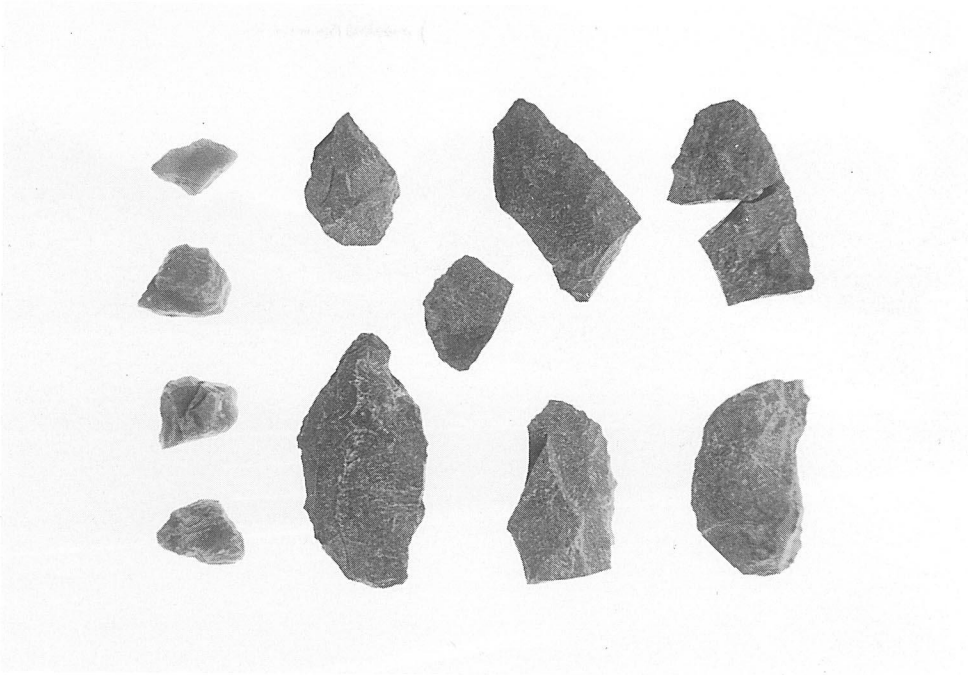
第１１図　九頭神遺跡調査地全景～北西から～

第１２図　第１トレンチ設定状況（九頭神遺跡）～西から～

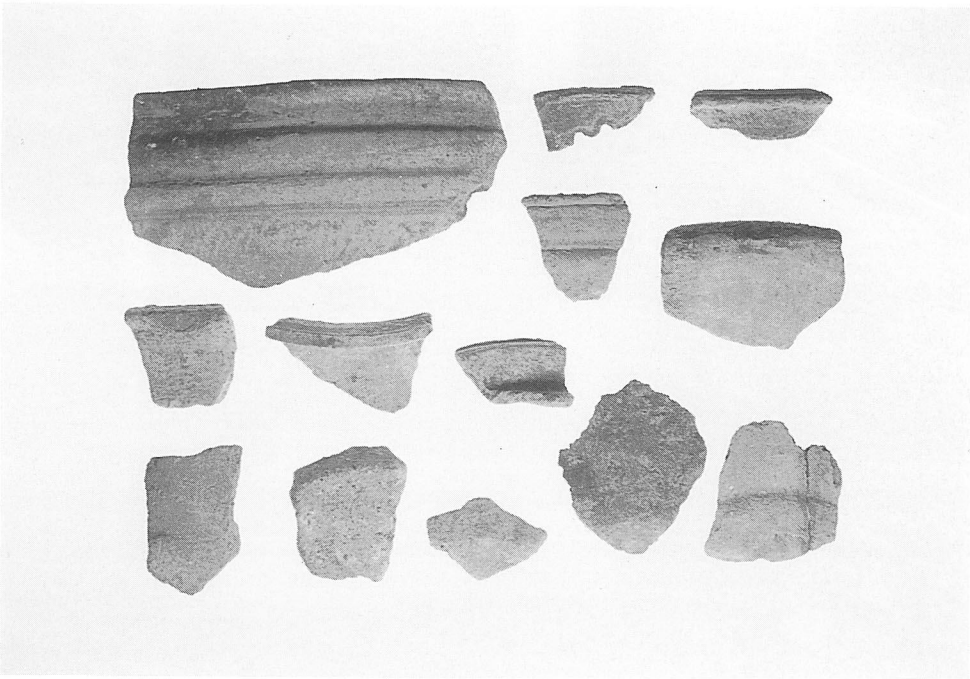
第１３図　第２トレンチ設定状況（九頭神遺跡）～西から～



第１４図　第３トレンチ設定状況（九頭神遺跡）～西から～



第１５図　九頭神遺跡包含層出土遺物･(石器)



第１６図　九頭神遺跡包含層出土遺物･(土器)

第１７図　宮が尾古墳隣接地伐採後の状況～南西から～

第１８図　第１トレンチ設定状況（宮が尾古墳隣接地）～南から～

第１９図　第２トレンチ設定状況（宮が尾古墳隣接地）～南から～

第２０図　宮が尾古墳隣接地トレンチ設定状況（全景）～北から～

第２１図　宮が尾古墳隣接地包含層出土遺物

第２２図　調査地と隣接する史跡指定地内で検出された宮が尾第２古墳～北から～

報告書抄録

ふりがな	くずかみいせき・みやがおこふんりんせつちちょうさほうこくしょ
書名	九頭神遺跡・宮が尾古墳隣接地調査報告書
副書名	～善通寺市内遺跡調査事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書３～
巻次	3
シリーズ名	善通寺市内遺跡調査事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	3
編著者名	笹川龍一
編集機関	善通寺市教育委員会　文化振興室
所在地	〒765　香川県善通寺市文京町二丁目１番４号
発行年月日	西暦 1995 年　3 月　31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード番号 市町村	コード番号 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みやがおこふん 宮が尾古墳 りんせつち 隣接地	かがわけん 香川県 ぜんつうじし 善通寺市 ぜんつうじちょう 善通寺町 3223-1	37204	—	34度 12分 10秒	133度 46分 17秒	19940902～ 19940930	掘削面積 50㎡ 対象面積 436㎡	善通寺市内遺跡調査事業（遺跡確認調査事業）
くずかみいせき 九頭神遺跡	かがわけん 香川県 ぜんつうじし 善通寺市 ぜんつうじちょう 下吉田町 くずかみ 九頭神13-5	37204	—	34度 13分 55秒	133度 46分 49秒	19940815～ 19940901	掘削面積 13㎡ 対象面積 317㎡	善通寺市内遺跡調査事業（遺跡確認調査事業）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮が尾古墳	散布地	弥生 古墳 中世	— — —	土器片　希少 石鏃　1 土器片　希少 土器片　希少	弥生時代前期から古墳時代後期にかけての集落遺跡の辺々部に形成された包含層を確認した。
九頭神遺跡	散布地	弥生 古墳 中世	— — —	土器片　希少 石器片　希少 土器片　希少 土器片　希少	付近に後期古墳が２基あり、これらの遺構に伴う遺物と考えられる。弥生土器片は付近一帯に散布。

九頭神遺跡・宮が尾古墳隣接地調査報告書
～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3～

平成７年３月３１日発行

編　集　香川県善通寺市文京町2丁目1番4号

発　行　善通寺市教育委員会　文化振興室

印　刷　(有)サカエ印刷　善通寺町1726-2